

北九州市立
文学館

友の会会報

第20号

2025年1月

文学館友の会は2024年12月8日に「黒崎古書店めぐり」を実施しました。八幡西区のJR黒崎駅周辺にお店を構える3つの古書店にご協力いただきました。お天気にも恵まれ、ぽかぽか陽気のなかを楽しく歩きながら、お気に入りの一冊や掘り出し物を、みなさん見つけることができました。
(大川内夏樹)

掘り出し物がいっぱい 黒崎駅周辺 古書店めぐり



「ルリニール書店」での参加者。右端は店主の小野さん

当日は午後零時半に黒崎コムシティ正
面入り口に集合。各書店の広さを考えて
17人の参加者を2グループに分け、時間



右から「古本や檸檬」「藤井書店」



差をつけて各お店を20分ずつ順番に巡り
ました。
最初に訪れたのは「古本や檸檬」(藤
田2の4の5。電話093・6331・
1124)。1958(昭和33)年創業。
10年ほど前までは黒崎商店街の寿通りで
営業をしていました。文学関連を中心に、
幅広いジャンルの本が所狭しと並んでい
ます。

特に充実しているものの一つが海外ミ
ステリー。参加者もいろいろと手に取っ
て、どれを買おうか悩んでいました。他
にも音楽、美術、漫画、絵本、さらには
郷土本など、本棚をじっくり見ていたら、
時間がいくらあっても足りません。

次は「藤井書店」(藤田2の5の19。
電話093・621・3200)。こちら
も昭和30年代初めに創業の老舗です。店
内は本の森といった感じで、参加者は本
棚からあふれんばかりの本の間を、宝探
しの探検家のように分け入っていきまし
た。

あちらの本棚をのぞき、こちらの本の
山を持ち上げているうちに「こんなに
お手頃のお値段で買えるの?」といった
掘り出し物のお宝を発見した人もいまし
た。店主の藤井武夫さんからは門司港の
絵葉書セットのプレゼントまでいただき
ました。

最後は「ルリニール書店」(熊西2の
7の7、電話093・280・2681)
です。2019年11月に若松で開業し、
22年12月に現在地に移転。古書も新刊本
も取り扱っていて、店内には喫茶スペー
スもあります。

店主の小野太郎さん独自の視点で厳選
した本が並べられていて、うっとりとし
る参加者もいました。古書は詩の関係の
ものが多く、絶版になった文庫本も魅力
的です。一般の書店では入手しにくい小
さな出版社の新刊本もたくさん並んでい
ます。

活動報告

歌とピアノによる「コンサート」
華やかなドレスで魅了

11月3日午後、白川深雪さん(ソプラノ)と後藤トモ子さん(ピアノ)をお迎えし、「歌とピアノによるデュオコンサート」日本の歌からオペラまで」が、文学館交流ひろばで開かれました。友の会主催のコンサートは初の試みでしたが、『芸術の秋』にふさわしい文学館と音楽のコラボレーションという企画に、定員を超える約70人が集まり大盛況でした。

登場されたお二人のドレス姿に会場はパツと華やかに。気さくで温かい人柄がにじむトークも相まって、一気にお二人の世界に引き込まれました。洋の東西を問わず親しまれている幅広いジャンルからの選曲で、一曲一曲を大切に届けようとされる演奏・歌唱に魅了され、音楽の素晴らしさに浸るひとときとなりました。

色とりどりの光を放つ視界いっぱいステンドグラスを背景に、ドーム天井に響くパイプオルガンの音色と清らかな歌声。荘厳な雰囲気にも包まれたレクイエムは、昨年始めの能登半島地震や世界の戦禍、大切な人との別れなど、聞く人それぞれが音楽と心象風景を重ね、胸に迫るものでした。



また、オペラ「トスカ」やカンツォーネは、分かりやすい解説もあり、言語を超えて親しむことができました。日本の歌謡曲や唱歌など、なじみ深い曲では、合唱する場面もあり、会場が一つになりました。

(大石仁美)

会員寄稿

目からウロコ「門司情景」展

森 荘八

特別企画展「門司情景 文学でたどる」のチラシを見てビックリした。企画展のテーマは主に「人」だが、今回はなんと「都市」。そしてその対象が、文学とは馴染みがないと思っていた門司となっていたからである。文学に下素人の私は、学芸員さんの「ギャラリートーク」がある日に出かけてみることにした。すると凄いくには、奈良時代から現代に至る膨大な文献・作品の中から、門司に関する文章を選び出し、原文でズズズイと展示してあったのである。

船でしか九州に来ることが出来なかった時代、門司は本土の人にとっては九州という島の到着口であり、九州から旅立つ人にとっては出発口であったのである。門司の土地を初めに踏んだ人も九州を発つ人も、それなりの感慨を記すのは当然かもしれない。

かくして門司に関する文献や作品が数多くあるのは分かったものの、膨大な文献・作品の中から、どうして、門司に関する文章を見つけ出したのか、まるで見当がつかない。学芸員さんに聞いたところ「パソコンなど使いつつ、いろいろな人に教えてもらったり、文献の調査をしたりして、作品を読み確認しました」とのこと。



何と手のかかる地道な作業だろうか。学芸員さんが多くの人たちの協力を得て開催にこぎつけたことあらためて頭が下がる。「目からウロコ」の企画展。ありがとうございます。

会員寄稿

松山の思ふ庄と「坂の上の雲」

田中 健

私にとって思い出に残る本は司馬遼太郎著「坂の上の雲」だ。私は2012年に55歳で会社を繰り上げ定年退職し、念願がなつて地元北九州に戻った。

最初の赴任地は1980年の福岡支店。その後は東京の本店→大阪支店→北九州支店→松山支店→本店→名古屋支店を経て最後は千葉支店。異動先は、力もなかったのに、昇進より異動先の魅力優先でお願いし、かつ新幹線「のぞみ」の停車駅で、大阪より東と申し入れていた。

1995年に松山への内示をもらって驚いた。だが「四国で一番人口が多く、住みよい街だ」と仲間から背中を押され、関西汽船の特別室に乗船、自らマイカーを運転し赴任した。いろいろな土地に住んだが、松山は一番「文化の薫る街」ではなかったかと思う。

社宅は路面電車の道後公園駅の目の前だった。7階の部屋からは道後温泉、子規記念館、伊佐爾波神社、それにかん畑が見渡せ、なんとなく俳句が浮かんできた。通勤途中には、旧制松山中学や秋山好古、真之兄弟が通った道場があり、どうも仕事をするような環境ではない。会社帰りには、坊ちゃん湯で一風呂浴びる。四季折々に神社仏閣の餅まきがあり、子どもたちと1日に何度も出かけ、毎回30個前後も拾った。

仕事モードでの赴任なのに旅行者気分。読書の習慣も吹っ飛び、「坂の上の雲」を読む機会も失ってしまった。四国八十八ヶ所巡礼にもチャレンジせず、1999年に本店に転勤したが、社宅から会社まで乗継ぎを含め通勤時間約50分の間は新聞を広げて読めないほどの混雑で、ついに「坂の上の雲」を手取ることとなった。

本店勤務の4年間で全巻をほぼ読み尽した。2020年のコロナ禍の寸前には、北九州市・大連市友好都市40年記念ツアーに便乗し、作品の舞台に行く機会も得た。これも何かの縁ですかねえ。

村田喜代子さん、町田そのこさんエール

小倉昭和館再建1年

2024年12月19日、小倉昭和館の再建1周年を記念するトークセッションが同館でありました。作家の村田喜代子さん、町田そのこさん、料理家の山際千津枝さん、同館を応援するシネクラブサポート会会長の中島俊介さんが登壇し、小倉昭和館館主の樋口智巳さんや、司会の鶴田弥生さんとともにトークを繰り広げました。

ここでは文学館に縁の深い作家2人の話を紹介します。子供の頃、映画館に行つてはいけないうと学校から言われていた村田さんは、映画館で先生が見張っているで電気がつく椅子の下に隠れたというエピソードを交え、映画が好きなのに充分見ることができない子供時代だったと往時を振り返りました。

その後シナリオライターを志したものの当時はシナリオ本がなく、映画館にノートと鉛筆を持って行って暗闇の中で書き写し、次の日は別の映画館に行つて、ということを繰り返しながら勉強したと言います。やがて映画産業が斜陽になったため小説の勉強を始めた、小説家になったきっかけについても話してくれました。

町田さんは小倉昭和館の思い出について「高校の時、初めてできた彼氏と来てフラれたことが一番忘れられない」と話し、この時の経験から「価値



右から町田さんと村田さん、樋口館主

観の違い」を学んだと言います。小倉昭和館の焼失について「行こうと思った時に必ずある場所という頭があったのでショックだった。いつでも大丈夫と思っていた傲慢さみたいなものを反省した。思い立った時には必ず行くべきだと学んだ」と語りました。

「今後の昭和館に期待すること」について村田さんは「映画館には、人が集まる、人の顔を見ることができるといふよさがある。寂しいと思う時に人に会える場、おいしいコーヒーを飲み「久しぶりね」とお話しができる、そんな場を作つてほしい」。さらに「映画に関連した本が置いてあれば人間にも本に出会える。そんな場になることを期待したい」と話しました。

町田さんも「映画と小説は密接で、どちらかが廃れるとどちらかにも影響がある。だからこそ一緒に支えあっていきたい。小説と映画がもっと共生していかないと」と応じました。

3月には「小倉昭和館映画祭」を企画するなど今後の動きも楽しみな同館。作家2人の思いがどのように反映されていくのか。ますます期待が高まります。

(植田詩生)

1面から続く

3店を巡った後は、黒崎ひびしんホールの会議室に集合して、購入した本を紹介し合いました。皆さんはそれぞれに関心が異なっており「その本はどういう本ですか?」「これはこういう本なんです」と、ここでも知らない本との出会いがありました。

最後に参加者の感想を紹介します。

「こんな企画を待っていたので、楽しかった。大満足です」「掘り出しものがたくさんあってびっくり!」「ずっと気になっていたお店に入ることができてうれしかった」「いろんなタイプの古書店があつて、面白かった」

各店主からも「古書との出会いは一期一会。これを機に時々のぞいていただければ」「古本を楽しんでくださいます」「本がたがご縁に感謝です」と、ご感想をいただきました。



黒崎ひびしんホールで

古書店巡りは友の会の初の試み。各店のご協力もあり無事に楽しく終えることができました。中でも「古本や檸檬」店主の村田も子さんには企画の準備にあたり、各書店をご紹介いただくなど多大なご協力をいただき、この場を借りて御礼申し上げます。

今後は北九州市の他の古書店を巡ったり、近隣の大学の学生にも参加を呼びかけたりといったことに挑戦できればと考えています。